数値計算法概論：No.8

1　数値積分 (周期関数)

No.5 の課題で、(6) 式のものは端点に特異性を持つ (微係数が発散する) ので収束性が遅い。こういった問題には (Aitken 加速 [1, 2] など) 別のテクニックが必要となる。

逆にある場合には台形則の収束性が極めて早くなる。解析的な周期関数 $f(x)$ の 1 周期 $[a, b]$ に渡る積分を台形則で計算した時の誤差は、$f^{(m)}(a) = f^{(m)}(b)$ (すべての m に対して) であるから、Euler-Maclaurin の総和公式で、$O(h^m)$ の形の誤差はなくなり、収束が極めて早くなる (ただし $\exp(-c/h)$ のような振舞いをする誤差は残り得る) [3]。従って、収束加速法が特に必要なくなる (また、Richardson 補外の単純な応用では扱えない)。

課題：

1.
$$\int_0^{2\pi} \frac{d\theta}{1 + p\cos\theta} \qquad (0 < p < 1) \tag{1}$$
を計算せよ。解析的には留数定理の応用 [4] で計算できる。

2.
$$J_n(z) = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \cos(nx - z\sin x)dx \tag{2}$$
(Bessel 関数 [5]) を計算して、収束性を評価して見よ。

2　一般的注意

2.1　レポート提出に付いて

数値積分について、No.5,8 の課題の中から 2 題以上と、自分で選んだ積分 1 題以上について台形則で計算せよ。収束性について議論し、収束加速法 (Richardson 補外) がうまく行く場合にはこれを使って精度向上を図ってみよ。

まず、何の積分を行なったのか方程式を明確に記し、それに対するプログラムと実行結果、収束性の考察、その他のコメントを付けてレポート No.2 として提出せよ。講義名、名前、学籍番号、提出日時を表紙に明記すること。提出期限は 12 月 22 日まで。コピーレポートはオリジナルも含め認めない。

解析的な結果が出せる場合は、その導出も書くこと。表・図を入れて分かり易く工夫したものは評価する。参考文献なども明記すること。また、コピーレポートは認めないが、互い

の議論によりレポートの質が向上した場合は評価するので、議論した部分・参考とした意見と相手の氏名を明記して出すこと。Fortran 以外の言語 (C,C++) を使った場合は、記しておくこと。

提出先は、野村 (理学部 2 号館 2641 号室、内線 2566、e-mail:knomura@stat.phys.kyushu-u.ac.jp)、メールでの提出も認める (この場合は、自分のところにかならず Cc: しておくこと、提出洩れがあるかないか後で確認する時に必要。また Subject: には Report No.2 と入れること。Word,Excel などを使った文書は私の方で読めないので、再送を要求する)。

2.2 参考図書

1. 数値計算一般について、
   「 数値計算の常識 」 伊理 正夫、藤野 和健 著、共立出版 (2400 円)
   は一通り数値計算を勉強してから読み直すとためになる。
2. レポート作成には、プログラムと実行結果のみではなく、明解かつ論理的な説明をするように努めること。説明順序、文章の構成、適当な数式、図表などに工夫することで、レポートの質が向上する。
   「 理科系の作文技術 」 木下 是雄 著、中公新書 (480 円)
   を参考にすること。

参考文献

[1] 「 数値計算の常識 」、伊理 正夫、藤野 和建 著、共立出版 (第 20 章 2 節、第 7 章 4 節)

[2] 「 数値計算法の数理 」、杉原 正顯、室田 一雄 著、岩波書店 (第 12 章 4 節 2)

[3] 「 数値計算の常識 」、伊理 正夫、藤野 和建 著、共立出版 (第 7 章 5 節)

[4] 「 物理応用 数学演習 」、後藤 憲一、山本 邦夫、神吉健 共著、共立出版 (第 4 章 5 節)

[5] 「 数学公式集 」 第 3 巻, 第 VI 編、岩波全書